

# 価値教育におけるアイデンティティの問題

## — プラグマティズムにおけるナショナルなものとインターナショナルなもの —

伊藤 敏子

### National and International Identities in Values Education : A Pragmatic Perspective

Toshiko ITO

#### 《abstract》

In pluralistic and globalized society, education today is no longer expected to fulfill its conventional role of imposing an existing value system. Ironically, however, this change has increased the importance of value education. Throughout its modern history, value education has often sought to advance a nationalistic agenda. As this agenda was largely discredited after World War II, value education has since sought to reconcile the international and the national, yet largely failed to strike a viable balance between the opposites. This paper reviews key concepts of pragmatist thinkers such as William James, George Herbert Mead and Richard Rorty and aims to reconcile the national and the international in value education from a pragmatic standpoint.

#### 1. はじめに — ナショナルなアイデンティティ —

現代社会は一方では多元化の進行という現象、他方ではグローバル化の浸透という現象に満たされ、既存の価値体系への適応を前提とした教育構想はかつての有効性を主張できない状況におかれている。しかし現代社会は、価値体系の脆弱化にもかかわらず—あるいは、まさに価値体系の脆弱化ゆえに—人間形成のプロセスにおいてかつて以上に大きな期待を価値教育に寄せている。価値体系の構築にさいして基点として機能するのはまず自らの立ち位置の理解、すなわち自らのアイデンティティの所在である。多元化そしてグローバル化の波に翻弄される時代、性急なアイデンティティ探しの旅は、その落ち着き先をナショナルなものの中に見出そうとすることが多い。スミス (Anthony D. Smith) によれば、ナショナルなものに収斂されるアイデンティティは、「人類が今日持ち合わせている集団アイデンティティのなかでもっとも基本的でもっとも包括的」(Smith 1991, p. 143) なものであるが、ここでは「ナショナルなものの独特の文化的遺産、さらにはそれとともに個人のアイデンティティを形作ってきた価値、シンボル、記憶、神話そして伝統の型の維持および継続的再解釈」(Smith 2003, p. 24 f.) が絶えず求められる。したがって、ナショナルなものを軸とする価値体系においては、必然的に、理性ではなく感性により大きな比重がおかれることになる。価値体系の不安定な時代、価値教育への期待は高まるが、そのなかで—理性の働きよりも感性の働きにより多くを委ねる—ナショナルなものをどのように扱うべきかはきわめて大きな問題としてクローズアップされてくる。

第二次世界大戦中、日本とドイツはナショナルなものに収斂されるアイデンティティを基盤とする価値体系への適応を国家主導の教育として推進し、国家総動員をも可能とする徹底した価値教育を実践する。第二次世界大戦後、日本とドイツは価値体系の基点としてナショナルなものとのインターナショナル

なものを常に併置させるという大きな変更を価値教育にとりこむことによって、一面的にナショナルなものに偏ることのない価値教育のあり方を模索することになる。日本の場合、修身教育を代替するものと終戦直後に位置づけられた公民科教育のなかで「国家生活」と「国際生活」を併置し (cf. 文部省 1946、46 f. 頁)、さらに公民科教育を受け継いだ社会科教育のなかで「正しい愛国心」と「国境をこえた人類愛」を等しいものであると強調する (cf. 岡田 1956、303 頁) ことで戦時下教育の修正を意識した価値教育を展開していく<sup>1</sup>。ドイツの場合、ナショナルなものに軸足をおく価値教育が大戦によって完全にその信頼を失墜させてしまったことから (cf. Ohnezeit 2007, S. 85)、戦後はアイデンティティのベクトルをナショナルなものと同インターナショナルなもの (人類愛) の併置へとずらすことで健全な価値教育に向かって舵を切ろうとする。ドイツでは各々の学校に価値教育への貢献が求められているが、その内容については州法 (Landesverfassung) に規定するところとなっている。ノルトライン・ヴェストファーレン州は、「神への畏敬の念、人間の尊厳への尊敬の念、社会的な取組への心構えを喚起することが教育の主たる目標である。若者は、人道 (Menschlichkeit)、民主主義そして自由の精神によって、異質なものを理解する態度の尊重および寛容へと、また、国民および故郷への愛によって国民共同体および平和的心情という (in Liebe zu Volk und Heimat, Völkergemeinschaft und Friedensgesinnung : 傍点は筆者) 自然な生活基盤を維持する責任へと教育されなければならない」(Art.7, Landesverfassung NW: Behler 1999, S. 20) とし、バーデン・ヴュルテンベルク州は、「神の前の責任感、キリスト教の隣人愛の精神によって、人道および平和愛へと (zur Menschlichkeit und Friedensliebe : 傍点は筆者)、国民および故郷への愛によって (in der Liebe zu Volk und Heimat : 傍点は筆者)、他者の尊厳および理解する態度の尊重、向上心、自己責任感そして社会的実証へと生徒を教育すること、そしてその個性および素質を発展させることによって生徒を支援すること」(Par.1, Abs.2, Schulgesetz BW: Schawan 2002, S. 42) を求めている。ここにみられるのは、戦時に価値体系の根幹をなしてきたナショナルなもの (「国民および故郷」) への志向性を維持しつつ、同時にナショナルなものを超越したものへの志向性 (「人道」、「平和的心情」ないし「平和愛」) を併置するという転換であり、換言すれば、国境を境界線として閉じた空間のなかで人々をつなごうとしていた価値教育から決別し、国境を意識しながらも国境を超えたところでも人々をつなごうとする価値教育を模索する姿である。

しかし実際には、ナショナルなものと同インターナショナルなものの併存は難しい<sup>2</sup>。その理由のひとつとしては、ナショナルなものに内在する一宗教性を含む一感性的要素の優位が挙げられる (cf. Ito 2008)。この視点から関心が寄せられるのは、19 世紀から 20 世紀への世紀転換期に相対立するものあいだに橋をかける立場として一この特性ゆえに相対主義の批判を受けることも多いが一アメリカに登場したプラグマティズムである。プラグマティズムはその「倫理的価値基盤の不在」(Tröhler / Oelkers 2005, S. 10) を批判されることもあり、価値教育をめぐる議論の論客としての意義は様々に解されうるが、ナショナルなものと同インターナショナルなものあいだにどのような橋をかける可能性があるかを

<sup>1</sup> 日本の場合、ナショナルなものに卓越した価値をおく発想を学校教育にもちこむことの可否については戦時下教育への反省から意見が分かれている。その一方で、身近なところに自己価値観を求める若者のあいだではナショナルなものにつながりを見出そうとする傾向が、価値崩壊や青少年犯罪への歯止めを求める年長者のあいだではナショナルなものをも射程に入れた公共性を強化しようとする傾向があり、ナショナルなものに傾斜する価値教育に対する抵抗感は急速に希薄化している。グローバル化へのまた多元化への反動もさらにこの現象に拍車をかけている。そこで顕著にみられるメルクマールはしかし、一面的にナショナルなものへの志向性ではなく一ナショナルなものへの志向性とインターナショナルなものへの志向性のバランスをうたう価値教育である。

<sup>2</sup> 中村清は、愛国心の延長線上に人類愛をおくことで国民形成を世界市民形成へ連続的に発展させようとする近代以降の公教育のプロジェクトが成功しなかった理由を探り、公共心をキーワードとして国家を超える公教育の可能性を追求している (cf. 中村 2008)。

考察するにあたっては一定の意義をもち、さらには価値教育の困難な時代における価値教育の方向性にも何らかの示唆を与えてくれることが期待される。アメリカのプラグマティストが参加した 20 世紀初頭のナショナルなものとインターナショナルなものの議論および 21 世紀初頭のナショナルなものとインターナショナルなものの議論を—日本のおよびドイツにおける議論も絡めながら—考察することで、ナショナルなものとインターナショナルなものの共存の可能性を探っていきたい。

## 2. プラグマティズムの誕生およびその受容

### 2. 1. プラグマティズムの誕生

プラグマティズムとは、認識の形而上学的な基礎づけを否定し、その妥当性を行為の効果に求めようとする立場である。プラグマティズムの創始者とされるパース (Charles Sanders Peirce, 1839–1914) は、カント (Immanuel Kant, 1724–1804) が『道徳形而上学原論』のなかでアприオリな絶対的固定的法則から導き出される行為を形容する術語である「道徳的 (moralisch)」に対置される概念として用いる—日常の具体的実践的状况から導き出される行為を形容する術語である—「実効的 (pragmatisch)」からプラグマティズム (pragmatism) という語を創出し、マサチューセッツ州ケンブリッジの形而上学クラブ (Metaphysical Club) の研究発表で 1871 年に初めてこの語を使用する。プラグマティズム普及の功労者であるジェイムズ (William James, 1842–1910) はその書『プラグマティズム』(1907) において、プラグマティズムはギリシア語 pragma (「行為 action」の意) に由来し、これは英語の practice (実際) および practical (实际的) という概念とその源を一にすると考える (cf. James 1907, p. 28)<sup>3</sup>。プラグマティズムの名を冠する哲学はしかしながら、一様ではない<sup>4</sup>。パースはその射程を「実際の結果によって、事実に基づく科学の『理論的な信念』と規定しているが、ジェイムズはその射程を拡大し (1898)、パースによる規定に「実際の結果によって、機械論的、唯物論的な科学に対する『情緒的な反動』ともいえる有神論的、唯心論的な主張」という規定を加え、「合理主義のもつ宗教性と経験主義のもつ事実との豊かな接触のもつ要求の双方を満たす」(ibid., p. 23)、そして—硬化した唯物主義とは対照的に—科学と反科学の要求を同時に満たすことのできるひとつの哲学を構想する<sup>5</sup>。

アメリカ哲学を代表するプラグマティズムではあるが、その生誕の地で必ずしも好意的に受け入れられていたわけではない。実証主義や経験主義の立場からは当初からプラグマティズムの論理構造の曖昧さが疑問視されていたし、マルクス主義やフランクフルト学派の論客からはプラグマティズムの日和見的主張が社会体制への迎合であるとして白眼視されていた。教育関係者には—これはスプートニク・ショック (1957) によってさらに強められることになるが—デューイ (John Dewey, 1859–1952) のプラグマティズムを理論的根拠とする進歩主義教育が学力低下の元凶であるとして敵視する現象さえみられた。プラグマティズムがポストモダンの先駆として再評価を受けるには、1980 年代を待たなければならなかったのである (cf. 柳沼 2002、1 f.頁)。

<sup>3</sup> ただし、パースはこの解釈に同意していない。

<sup>4</sup> ラヴジョイ (Arthur O. Lovejoy, 1873-1962) はプラグマティズムに 13 のヴァリエーションを認めている (cf. Bellmann 2007 b, S.186)。

<sup>5</sup> パースはジェイムズによるこの拡大解釈に異を唱え、「知的な意味内容」・「理性的な行為」・「一般的な経験」に限定した自らの哲学の呼称として—「情緒的な反応」や「特殊な経験」を付加するジェイムズのプラグマティズムと—線を画するために—プラグマティシズム (pragmaticism) を用いるようになる。

## 2. 2. 日本における受容

「プラグマティズム」という概念を記述することのない受容はジェイムズの諸論文の紹介・翻訳を通じて一たとえば、日本で初めての心理学の専任教授を東京大学で務めた元良勇次郎（1858-1912）の「知行合一主義」という訳語によって一すでに 1888 年ごろから日本では始まっていたと山田英世はみる（cf. 山田 1983、3 頁）<sup>6</sup>。日本でプラグマティズムという概念がはじめて登場したのは 1905 年 10 月に紀平正美が『哲学雑誌』に掲載した論文「学問の分業と哲学の任務」においてであり、そのなかで紀平はプラグマティズムに「従来の哲学の天上に飛翔し去ったものを再び地上のものとなし、其形式に内容を与ふると云ふ方面には大なる功」（同書、51 頁）を認めている。プラグマティズムが広く知られるようになるきっかけはしかし、桑木厳翼（1874-1946）と田中王堂（1867-1932）<sup>7</sup>による「プラグマティズム論争」にある。この論争は 1905 年 12 月に哲学会で桑木が行った講演「プラグマティズムに就て」に端を発する。この講演のなかで桑木はプラグマティズムに対し、第一に「起源と本質との説明の区別」の欠如していること一したがって、歴史的視点と論理的視点との混同一、第二に「主観的観念論」に偏重していること一したがって、社会的存在論の不成立一という観点からの批判を加える（cf. 同書、67 頁）。翌 1906 年に『哲学雑誌』にこの講演原稿が掲載されると、田中は桑木のプラグマティズム論を、①プラグマティズムは主意主義に基礎をおく、②プラグマティズムの出現は哲学衰退の兆しである、③プラグマティズムは文学芸術の意義に踏み込めない、④プラグマティズムは行為への偏重ゆえに純粹哲学としては不完全である、という 4 点にまとめた上で、自らのプラグマティズム論をこれに対置させるかたちで、①プラグマティズムは主意説と主知説の包和である、②プラグマティズムの出現は哲学の勃興の兆しである、③プラグマティズムは文学芸術の意義を発揮する唯一の哲学である、④プラグマティズムは純粹哲学の最高峰である、と紹介する論文を同誌に掲載して桑木批判を行い（cf. 同書、73 頁）、これに対する桑木の答弁が後日同誌に掲載されるという展開をみせる<sup>8</sup>。なお、この時期に桑木は『哲学大辞典』のために「プラグマティズム」の解説文を執筆し、「実用主義或は實際主義と訳す。一言に約すれば、真理の標準を實際上の効果如何に由りて定めんとする方法」（同書、60 頁）であり、これはまた「主行主義」とも訳しうると述べるが、この解説文は明治期日本におけるプラグマティズム理解の水準を知る手がかりとされる<sup>9</sup>。

日本におけるプラグマティズムの導入を考察した鶴見俊輔は、プラグマティズムを実践した日本人として福沢諭吉（1834-1901）、大杉栄（1885-1923）、国分一太郎（1911-85）、柳田國男（1875-1962）の名を挙げている<sup>10</sup>。しかし、プラグマティズムと教育の連関から特記されるのは、成瀬仁蔵（1858-1919）の事例である。成瀬は 1890 年から 1893 年にかけてのアメリカ滞在中にジェイムズと知己を得、1907 年 5 月にジェイムズの『プラグマティズム』が刊行されると、「主行主義」という訳語を当てた上

<sup>6</sup> 山田は、1898 年にイェナ大学およびライプツィヒ大学に学び「日本のカント」として知られる大西祝（1864-1900）が、その批判的实在論と改造論でもって実際には「日本のデューイ」として一武士道の倫理の市民的表現をもって（cf. 山田 1983、42 頁）一アメリカ・プラグマティズム受容の素地を用意したと考える（cf. 同書、16 頁）。

<sup>7</sup> 田中は 1889 年に渡米してシカゴ大学のデューイのもとで学び、帰国後は早稲田大学および立教大学で教鞭をとりながらプラグマティズムの普及に尽力する。

<sup>8</sup> このプラグマティズム論争が文壇に飛び火して、夏目漱石（1867-1916）に代表される理想派と長谷川天溪（1876-1940）に代表される自然派とのあいだに自然主義文学論争が生起している（cf. 山田 1983、53 頁）。

<sup>9</sup> この項のなかには、ドイツの学者がプラグマティズムに対して一般に反対排斥の態度をとっていると述べられている（cf. 山田 1983、62 頁）。

<sup>10</sup> 大正期の無政府主義者である大杉はプラグマティズムにしばしば言及している。大杉の関心は、このアメリカ生まれの思想が「知力や理性」ではなく「本能や行為」に重きをおいているところに注がれている（cf. 鶴見 1986、327 頁）。

で、同年11月から12月にかけて日本女子大学で「実践倫理講話」と題した連続講義を行っている。シラー (Ferdinand Canning Scott Schiller, 1864-1937)、そしてとりわけジェームズに依拠しつつ、成瀬はこの講義のなかで主行主義を「人間の外から受けた経験と、内から発する経験との全体を纏めて、其の間の統一を計る」(成瀬 1907、821頁)ものと定義する。この特性ゆえに、主行主義は「世界の宗教を凡て同化し<sup>11</sup>、且多くの反対の主義ある哲学をも調和する」(同上)こと、さらには「科学を宗教との調和」(同上)へと導くことも可能となることを指摘する。成瀬は、ジェームズのプラグマティズムから得たこの発想をさらに独自の「帰一思想」(影山 1994、50頁)<sup>12</sup>へと進展させている。「帰一」とは、「一元を彼方に据えながらの多元主義、多元的価値の調和と協調を保持した思考法を示唆する語」(同書、109頁)である。1912年、姉崎正治 (1873-1949)、洪沢栄一 (1840-1931)、浮田和民 (1860-1946)、森村市左衛門 (1839-1919)らと国際的思想交流団体である帰一協会 (The Association Concordia) を発足させた成瀬は、「万国的精神の発現」、「物質主義に対する精神主義の勝利」、「東西文明の調和」、「世界宗教の帰一」(同書、112頁)による人類社会全体の進歩・向上をその趣旨として掲げ、同年8月から翌年3月までの欧米滞在中に172名の知識人の署名を集めている。なお、帰一協会の趣旨に賛同したアメリカ人としてはデューイが、ドイツ人としてはオイケン (Rudolf Eucken, 1848-1926)、ヘッケル (Ernst Heinrich Haeckel, 1834-1919)、ライン (Wilhelm Rein, 1847-1929)、ハルナック (Adolf von Harnack, 1851-1930)、ヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920)、オストワルト (Friedrich Wilhelm Ostwald, 1853-1932) の名が挙げられる (cf. 中嶋 1987 57頁)。なお、1919年に来日したデューイは、病床にあった晩年の成瀬を見舞っている (cf. 中嶋 2002 212頁)。

### 2. 3. ドイツにおける受容

20世紀への世紀転換期にヨーロッパに伝播したプラグマティズムであるが、ドイツはこのアメリカ生まれの思想に当初あまり関心を示していない。その背景としては、ドイツの教養・ドイツ的文化を唱道した当時のドイツの知識人が「実証主義や合理主義、経験主義やプラグマティズムに対抗して、反啓蒙主義かつ観念的ロマン主義の伝統を強化する」(Kamphausen 2005, S. 160) 趨勢にあったこと、さらには導入時にプラグマティズムが「軽率にもニーチェやベルグソンを範とする生の哲学と同一視された」(ebd.)<sup>13</sup>ことがある。ドイツにおけるプラグマティズムの知名度を飛躍的に高める契機となったのは、今から100年前 (1908) にハイデルベルクで開催された第3回国際哲学会議である。この会議では絶対的プラグマティズムを自称するロイス (Josiah Royce, 1855-1916) が「最近の研究の観点からみた真理の問題」について、アームストロング (Andrew Campell Armstrong, 1860-1935) が「プラグマティズムの展開」について、イギリスにプラグマティズムを紹介し人間主義を自認するシラーが「合理主義からみた真理概念」について発表する。しかし、この会議も大方のドイツの哲学者にはプラグマティズ

<sup>11</sup> この理解にしたがえば、「主行主義はキリスト教の真髄も、仏教の精粹を持って居り、其の上神道の要素も、凡ての真髄を容れて、大いなる同情を以て育てて行く」(成瀬 1907、847頁)ことになる。

<sup>12</sup> 影山礼子は、成瀬が一幼少時に受けたであろう陽明学の素養が (cf. 影山 1994、19頁) もたらしたそのアナロジーとしての—ユニテリアリズムへの傾倒から帰一思想の展開へ—といたる契機として、ジェームズのプラグマティズムから受けた影響に注目している (cf. 同書、85頁および93頁)。なお、帰一協会の胎動はすでに1911年にはじまる思想・道徳の検討会合にみられ、翌年に姉崎正治がこの会合に王陽明 (1472-1528) の『万徳帰一』に依拠した帰一協会の名称を冠したことで正式に始動することになる (cf. 影山 1994、118頁 および 中嶋 1986、56頁)。したがって、帰一協会の結成の機を1912年に内務省が企画した三教会同 (神道・仏教・キリスト教の三宗教の指導者の会同) にみる解釈は誤りである (cf. 中嶋 1986、55頁)。

<sup>13</sup> リッケルト (Heinrich Rickert, 1863-1936) はこの見解を代表している (cf. Gonon 2005, S.186)。

ムの好意的な受容の契機とはならなかったようである。たとえば、1922年に刊行されたアイスラー（Rudolf Eisler, 1873–1926）の『哲学事典』では、プラグマティズムには認識における意志・目的契機を強調したという貢献が認められるものの、その「何にでも適用されうる」曖昧さが批判の対象となっている（Gonon 2005, S. 184）。プラグマティズムの相対主義はまた、ヴィンデルバント（Wilhelm Windelband, 1848–1915）のもとで、プロタゴラス的態度の現代版と揶揄され、また、リール（Alois Riehl, 1844–1924）のもとでは主観主義的かつ反哲学的邪道と断罪され、詭弁学に近い存在と決めつけられる（cf. ebd., S. 187）。

プラグマティズムに対するこうした哲学者の否定的な態度は、教育学へのプラグマティズムの影響にも抑制力として働くことになる。1914年に刊行された『教育学事典』で「プラグマティズム」の項目を担当したスウィタルスキ（Bronislaus Wladislaus Switalski）は、プラグマティズムが確固たる絶対的な真理の存在を否定していること、真理を人間にとっての実践的証明と同一視することにより「際限のない相対主義」に陥っていることを指摘し、リール同様、プラグマティズムを詭弁学派の系譜に位置づけている（cf. ebd., S. 188）。このような趨勢のなかで特筆されるのは、ケルシェンシュタイナー（Georg Michael Kerschensteiner, 1854–1932）のみせたプラグマティズムに対する強い関心である。ケルシェンシュタイナーはプラグマティズムを功利主義の変形とみなし、そこには教育実践とのあいだに多くの共通点がみられると考える。しかしながら、諸価値を序列化することを拒否するプラグマティズムは、絶対的価値の上に構築され批判的現実主義を目指すケルシェンシュタイナーの陶冶理論とは機を一にするものではなかった（cf. ebd., S. 189）。この時代、ジェイムズは心理学者として、デューイは学校改革者として、それぞれの分野に限定された受容が主流であり、教育学の根本理論にプラグマティズムの発想を反映させようとする動きにはいたらぬまま、プラグマティズム受容の第一の波は終息する<sup>14</sup>。

終戦直後の再教育の枠組みのなかで、ドイツの観念主義とアメリカのプラグマティズムの二項対立という理解のもとにプラグマティズムへの関心は再び活性化する（cf. Bellmann 2007 b, S. 73）。しかし、第二次世界大戦後にデューイを「再発見した」国家社会主義イデオログ、ヴィルヘルム（Theodor Wilhelm, 1906–, Pseudonym Friedrich Oettinger）がプラグマティズムにみせた消極的姿勢、フロイト＝マルクス主義を標榜するフランクフルト学派の批判理論、アーレント（Hannah Arendt, 1906–75）ら実存主義者が行った道具主義そして実証主義と一不当にも一プラグマティズムを同列にならべた上での弾劾によって、先入観にとらわれないプラグマティズムの受容は阻まれ、教育学のメインストリームにのることを逸する（cf. Brumlik 2008, S. 436）。このような状況のなか、スプートニク・ショックの到来は、プラグマティズムの第二の受容の波に終止符をうつ（Bellmann 2007 b, S. 73）。

1960年代および1970年代のドイツの教育改革においては、民主主義・解放・機会均等というスローガンにみられるように、イデオロギー的ではなくプラグマティックな教育が目指されるが、プラグマティズムの根幹をなす二元論の克服という観点からは、素質と環境、個人と社会、形式陶冶と実質陶冶といった対概念にみられるように対処を要する課題が山積して残された状態にある（cf. Bellmann 2007 a, S. 422）。近年では、経済協力開発機構（OECD）の生み出した国際学習到達度調査（PISA）が、教育学におけるプラグマティズム現象として注目されている。PISAにおける「機能上の判断能力」に注目するフクス（Hans-Werner Fuchs）、あるいはPISAの趣旨を「実用性・有用性を目指す生涯にわたる適応」にみるエルカース（Jürgen Oelkers）によれば、PISAの精神はプラグマティズムの体現にほかな

<sup>14</sup> ドイツ帝国の時代ではプラグマティズムは学校改革の範として新教育運動家たちが注目し、ワイマール共和国の時代ではドイツ教育学の民主化への貢献として教育省主導の注目があり、国家社会主義では国家社会主義の活動信念とアメリカのプラグマティズムの親和性が主張された（cf. Bellmann 2007 b, S.71 f.）。

らない<sup>15</sup>。アングロサクソンのプラグマティズムは長くドイツの考え方になじまないものとされてきたが、昨今の教育改革ではドイツがプラグマティズムを活用、アメリカは離反するという傾向すらみえる。1980年代以降、エルカースやズール（Martin Suhr）による著作および翻訳によってデューイの受容の道が拡大されたことで、1990年代にはプラグマティズム・ルネッサンスないしはプラグマティズム・リバイバルとも呼ばれる現象が生起している<sup>16</sup>。

### 3. アイデンティティとしてのナショナル—インターナショナル—問題

#### 3. 1. 20世紀初頭のプラグマティストにおける議論

20世紀初頭、プラグマティズムに基づく教育への提言は、社会情勢を踏まえてナショナルなものを意識したかたちで行われている。すなわち、「アメリカ」というナショナルなものが、「アメリカ」外とのインターナショナルなものを念頭においたときに、今後どのように扱われるべきであるかという問いに対する答えである。その基底をなしているのは、他国への圧迫・干渉を推進するヨーロッパ（そして日本）の政策を前にして、アメリカにおけるナショナルなものとインターナショナルなものに対する新しい態度が必要とされているという認識の生起である。

この動きに関して注目されるのは、ジェイムズが1910年に国際平和協会（Association for International Conciliation）のために執筆した『戦争の道徳的代用品（The Moral Equivalent of War）』である。この論文におけるジェイムズの主張は、人間に宿る抑制しきれない、しかも反省的批判にさらされている本能である闘争本能（military instincts）の存在を認めたくえて、これを建設的な代用品—戦争の代わりとなる道徳的なもの—へと向きかえることにある。第5代大統領モンロー（James Monroe 1758—1831、任期1817—25）の提唱により1823年から孤立主義の外交原則をかかげるアメリカではあるが、門戸開放政策を主張する第25代大統領マッキンリー（William McKinley 1843—1901、任期1897—1901）政権下、スペインの植民地キューバの独立運動を契機として勃発した米西戦争<sup>17</sup>によって、1898年には3ヶ月にわたって「戦争」の文字があらゆる新聞の見出しを飾るという事態を体験することになる。ジェイムズの描く「平和の支配」する「ある種の社会主義的平衡の到来」（James 1910, p. 4）というユートピア像は、直接的にはこの米西戦争の体験、間接的には日清戦争・日露戦争の結果に代表

<sup>15</sup> ベルマン（Johannes Bellmann）はしかしながらPISAのキーワードを緻密に分析し、たとえばスタンダードを設定するというPISAの考え方がプラグマティズムの反映とする解釈を退ける（cf. Bellmann 2007 a/Bellmann 2007 b S.190）。

<sup>16</sup> ベルマンは現代におけるプラグマティズム・ルネッサンス現象ないしはプラグマティズム・リバイバル現象（cf. Bellmann 2007 b, S.179 f.）を分析し、そこに生活用語としてのプラグマティズムと学術用語としてのプラグマティズムの区別を設けることの必要性を指摘する。生活用語としてのプラグマティズムは「使用や行動や事柄に即した」（Bellmann 2007 a, S.421）様を指し、感情をまじえることのないすぐれた有用性志向ではあるが、自己利益に導かれ道徳的なためらいの欠如したパワーポリティクスといったイメージに代表されるように、どちらかといえばドイツでは長くネガティブな印象を与えてきた。しかし、1990年代以降、プラグマティズムは生活用語として、有用できちんとしているがどこか退屈で野暮であるという意を払拭し、「ダイナミックで改革する意志のある成果本位のもの」（ebd., S.422）というポジティブな印象で用いられるようになり、それは「イデオロギー的で教条主義的で文化闘争的なもの」（ebd.）に対置されることになる。

<sup>17</sup> 米西戦争ではアメリカが勝利し、その結果、フィリピン、グアム、プエルト・リコはアメリカに譲渡され、独立を承認されたキューバはアメリカの保護国となり、アメリカは西太平洋への拠点を手中にすることに成功する。

される当時の世界情勢に関する情報<sup>18</sup>をもとに生み出されたものである。そこでは、「理性的な主張が、度を越えた野心に取って代わられなければならない」(ibid.)、「偽りのない私情から生じたあらゆる衝突を、良識や理性によって合意へと導くべきこと」が求められる。ジェームズ自身は「そういったインターナショナルな理性的行動 (international rationality) が可能であると確信することがわれわれの義務である」(ibid., p. 2) という認識にたつが、実際には衝突した双方を同じテーブルにつかせることは難しいことから、現実的な戦争回避の一方途として戦争において獲得されると考えられてきた徳を戦争に依拠することなく育成することを提言する。

ジェームズは自国の戦争体験を踏まえ、軍人の特徴 (military character) には広めるべき優れたものもあることを認める (cf. ibid., p. 2 f.)。自らの所属する共同体のために立ちがる市民としての情熱は人間として望ましい資質であり、「剛勇、柔弱への軽蔑、私利の放棄、命令への服従」などに代表される軍人的情操がもつ高次なる側面 (the higher aspects of militaristic sentiment) は武徳 (martial virtues) として堅持されるべきものである。しかし、戦争は道徳的に容認されない以上<sup>19</sup>、戦争の道徳的代用物すなわち市民的事業によってこれらの武徳が培われることが望まれる (cf. ibid., p. 5)<sup>20</sup>。戦争によらない武徳の育成を推進することによって期待されるのは、「軍人の誉という古いモラルの廃墟の上に、市民的榮譽という確固としたモラルの体系が立ち上げられる」ことであり、そこにはこれまでわれわれの心を占領していた「戦争＝機能 (war-function)」が消滅し「建設的関心 (constructive interests)」(ibid.) が強制力 (imperative) をもつ世界が現出する。

およそ20年を経て、ミード (George Herbert Mead, 1863-1931) はジェームズの『戦争の道徳的代用品』を批判的に考察し、『ナショナルな考え方とインターナショナルな考え方 (National-Mindedness and International-Mindedness)』(1929) という表題で発表している。戦争への熱狂を他のものへの熱狂—社会に必要な仕事に若者を徴用する熱狂—に向きかえることによってジェームズが前者から得られるものに等しい感情を作り出そうとしていることに反駁し、ミードはまずそのような熱狂は作り出せるものではないこと (cf. Mead 1929, p. 401 / p. 404)、さらに感情的であればあるほど排他性が増大するという現象が生じることを指摘する (cf. ibid., p. 388)<sup>21</sup>。このジェームズ批判にたつてミードは、イタリアやロシアの例をあげながら、心臓 (diaphragms) や直感的応答 (visceral responses) によってではなく頭脳 (head) によって社会全体に望ましいことを模索するという道を提唱する (cf. ibid., p. 402)。共同体への感情的なアイデンティティは結果的に戦争の原因となる感情的融合を引き起こしうるものであり、過去の戦争の背景にはしばしば「知性で把握できなくなればなるほど共同体への一致が強調され

<sup>18</sup> ジェームズは、前年 (1909) にリー将軍 (Homer Lea 1876-1912) が著した『無知なる剛勇 (The Valor of Ignorance)』(1909) を引きながら戦争のもつ生物学的社会的必然性に言及し、戦争への覚悟がナショナリティの精髓であり戦争の能力がネーションの繁栄の尺度となることを説く。アジアの情勢に詳しいリー将軍は、中国とロシアに続いてフィリピン、ハワイ、アラスカといった山脈以西の海岸の覇権を虎視眈々とねらっている日本が、何ら抵抗を受けることなくこれらの島々、アラスカ、オレゴン、南カリフォルニアを簡単に手にするであろうし、2週間もすればサンフランシスコを譲り受け、3~4ヶ月でアメリカを解体してしまうであろうという予測をしており、ジェームズもこの予測を支持している (cf. James 1910, p. 3)。

<sup>19</sup> 人間本性のなかにはいつの時代も好戦的な衝動が宿るが、略奪や支配を目的とする戦争はもはや道徳的には認められないことから、近年の戦争ではたとえば「略奪と(自国の)繁栄のために戦争を繰り返すドイツと日本に対して、イギリスおよびアメリカは平和のために立ち上がる」といった説明がなされる (cf. James 1910, p. 2)。

<sup>20</sup> 聖職者や医療関係者はすでに戦争に依存することなく同様の徳に向かって養成されているとジェームズは考える。

<sup>21</sup> ミードは家族、仕事、学校への忠誠を例にとり、感情的であればあるほど排他性が増大するという法則性を指摘する (cf. Mead 1929, p.388)。



る」(ibid., p. 398) という現象が潜んでいたことを反省的に考察する姿勢がそこにはみられる。「われわれは自らが所属している大いなる共同体という観点から自身を見つめなければならない」(ibid., S. 400) ことを認めつつ、ミードは「われわれはナショナルな精神 (a national soul) に左右されることなく、ナショナルな考え方 (national-mindedness) を獲得する必要がある」(ibid., p. 401) ことを強調する<sup>22</sup>。さらにミードは、このナショナルな考え方は教育によって理性的に鍛えられることでさらに高められる必要があり、そこではじめてわれわれは最終的に目指すべき「インターナショナルな考え方 (international-mindedness)」を獲得するにいたると考える (ibid., p. 406)<sup>23</sup>。

1910年にジェームズの提起した論考は世界大戦の経験を経ないものであり、1929年にミードの提起した論考は第一次世界大戦の経験、さらには国際連盟<sup>24</sup>の成立を踏まえたものである。ナショナルなものと同インターナショナルなものに対する姿勢は、こういった歴史的前提の相違をあらかじめ差し引いて考察されなければならない。この点については、ミード自身も以下のように確認している。「[第一次世界]大戦は、ネーションズの共同体へと発展する文明が取り組む問題—インターナショナルな考え方の必要—を提起した。戦うネーションズのあいだに共通する関心を見つけ出そうとする知性や意志のなかに、またこれらをそこにある相違点の解明や可能な共同生活のための基礎を築こうとする知性や意志のなかに、戦争の道徳的代用品は見出されることになる」(ibid., p. 403 f.)。ただし、ジェームズの感情に依拠した提案への対案として知性・理性を依拠した提案を行ったミードは、ジェームズの理想が知性・理性にあるもののその目的へ到達することの難しさゆえに暫定的方策として感情を軸にした構想を展開したことを看過しているといえる。

### 3. 2. 20世紀の体験の帰結としての議論

誕生から一世紀を経て二つの世界大戦に加え多元化・グローバル化を経験したプラグマティズムは現在、ナショナルなものと同インターナショナルなものにどのように向き合おうとしているのだろうか。昨年(2007)世を去ったローティ (Richard Rorty, 1931-2007) は、「知識の増加 (Vermehrung von Wissen) ではなく感性の教化 (Kultivierung von Gefühlen) を目指したプラグマティスト」(Wenzel

<sup>22</sup> ミードが1929年に提示したナショナルな考え方と同インターナショナルな考え方の対比は興味深いことにプラグマティズム受容の基礎を築いたとされる大西祝の著作のなかに—ミードに先行して—すでに19世紀にみられる。大西は—普遍的「倫理」たりうる—ロゴス的な武士道と—特殊な日本の「心情」にとどまる—パトス的な大和魂を区別し、大和魂のレベルにある国家主義的態度を批判する (cf. 山田 1983, 33 f.頁) 立場から、「教育と宗教の衝突」論争では教育勅語を核とする教育の推進者である井上哲学次郎 (1855-1944) と真っ向から対立する。ただし、「個別・特殊な実践倫理として形成されてきた武士道」は「普遍的理性の哲学を有するストア派のコスモポリテースの倫理」を目指さなければ、「特殊日本的な大和魂という、主観的・地方的なパトス」(同書、36頁)ともなりうる。大西は—後述するローティとは異なり—「国家やその伝統的精神をそのまま絶対化することなく、つねに、それらを世界史のプロセスのなかに特殊化し、相対化しようとし」ており、大西はこの世界主義 (コスモポリタニズム) の姿勢を—ジェームズ同様、世界大戦を経験することがなかったにもかかわらず—自らの宗教であるプロテスタンティズムから身につけたものと推測される (cf. 同書、37頁)。

<sup>23</sup> ミードによれば、ナショナルな考え方と同インターナショナルな考え方は、対立ないし区分をもつことなく「相互に複雑に絡み合っている」(Mead 1929, p. 405)。それにもかかわらずインターナショナルな考え方に到達することを困難にしている主要な原因は「インターナショナルな関心が衝突するからではなく、ネーションが—表向きの目的のためにではなく—ナショナルな結束の自覚ゆえの戦争の覚悟、闘う覚悟ほどには容易にはできない自己決定およびナショナルな自尊心を感じている」(ibid.) ことにある。

<sup>24</sup> 国際連盟は—ウィルソン大統領 (Thomas Woodrow Wilson, 1856-1924, 任期 1913-21) の主唱により—ヴェルサイユ条約の規定に基づいて1920年1月に成立するが、ヴェルサイユ条約の批准を上院で獲得できなかったアメリカは当初から不参加であった。

2007)であり、とりわけジェームズとデューイに依拠しながら (cf. Reese-Schäfer 1991, S. 51; Horster 1991, S. 16) いわゆるネオプラグマティズムによってプラグマティズムの再興に寄与している。グローバル化の危機を克服する方途を超国家的機構に求めようとする一たとえばハーバマス (Jürgen Habermas) の一姿勢を基本的には支持した上で、ローティはわれわれが実際に超国家的機構の成立を待つことができるかを問い、「われわれは自己確認のためにナショナルな物語 (eine nationale Erzählung) を必要としている」(Rorty 1997) と唱える。「アメリカは歴史の最終目標であり、したがって無比のアメリカ精神を記述することがアメリカ哲学の課題である」とデューイの思想にみられる穏健な愛国主義 (chauvinism) に一自らに向けられた相対主義という批判への抗議<sup>25</sup>とも受け取れる (Reese-Schäfer 1991, S. 127) —ノスタルジーを折々に示しながらも、その一方でローティは自らの一憲法現実ではなく憲法理念としての一アメリカ主義をアイロニーで緩和することを試みる (cf. ebd., S. 126)。

ローティが目指すユートピアはリベラル・アイロニストの連帯感情で満たされた世界である。リベラリストとは一シュクラー (Judith Nisse Shklar, 1928–92) の定義にあるように一「われわれがなしうる最悪のことは残酷さだと考える者」の意であり、アイロニストとは「みずからの決定的な信念や欲求が偶然のものに過ぎないという事実に向き合う者」の意であり、したがって、リベラル・アイロニストとは、「基礎づけることはできない欲求として、人間が受ける苦痛の減少することを、また人間が与える屈辱の消滅することを希望できる者」(Rorty 1989 b, p. xv) の意である。リベラル・アイロニストによって構成されたユートピアは「探求 (inquiry) によってではなく、一見知らぬ人間を苦悩する仲間とみなす能力という意味での一想像力 (imagination) によって」(cf. ibid., p. xvi) 実現されるものであり、このユートピアを満たす「連帯 (solidarity)」は、「発見される (discovered) のではなく」われわれとは疎遠な他者が受ける苦痛や屈辱を細部にわたって受け取る感受性を拡張することによって一すなわち、類似点を見出すことを通じて「彼ら (them)」としてではなく「われわれの一員 (one of us)」とみなすことによって一「創造される (created)」(ibid., p. xvi)<sup>26</sup>。「われわれ」意識 (we-intentions) の拡張は教育によって実現しうるものであるが、この目的のためにローティが特に推奨するのは残酷さの回避につながる英雄の物語やマイノリティの物語の鑑賞である (cf. ibid., p. 198)。道徳上の感受性は文学上の感受性からそれほど隔たるものではないと考えるローティは (cf. Rorty 1982, p. 66)、感受性を育成するという目的に供する文学の例としてナポコフ (Vladimir Nabokov, 1899–1977) とオーウェル (Georg Orwell, 1903–50) の作品を『偶然性・アイロニー・連帯 (Contingency, irony, and solidarity)』のなかで詳細に検討している。英雄の物語やマイノリティの物語の鑑賞によって生じた感受性の拡張は連帯感情の拡張に重なるものであり (vgl. Fetscher 2007)、そこに達成される「感性の次元におけるリベラリズム (compassionate liberalism; Liberalismus als Herzensangelegenheit)」(Wenzel 2007) は、ジェームズの発想に連なる側面をみせている<sup>27</sup>。

<sup>25</sup> ローティは相対主義の存在自体を疑問視する。なぜなら、「相対主義はあらゆる確信がある点であるいはあらゆる任意の点で他の確信と同様であるという見解であるが、誰もこのような見解はもっていない」(Rorty 1982, p.166) からである。

<sup>26</sup> ローティは、キリスト教の隣人愛やミル (John Stuart Mill, 1806-73) の功利主義的倫理に依拠するこの感受性の育成がアウシュヴィッツの悲劇の繰り返しを阻止する原動力となることを期待している (cf. Reese-Schäfer 1991, S.103)。

<sup>27</sup> ただし、アイロニックな自己創造の言語によって表現される「私的なもの」とリベラルな社会正義の言語によって表現される「公的なもの」の共約不可能性を指摘した上で、ローティは一公私の融合を目指すデューイや個人の心情を重視するジェームズとは異なり一「私的なもの」のなかに苦痛や屈辱への感受性を培うことの重要性を主張する (cf. 柳沼 2002、166 頁)。

ローティにおけるナショナルなものと同インターナショナルなものとの考察のなかで大きな議論の対象となるのは「自文化中心主義 (ethnocentrism)」という概念である。ローティは、基準を自集団の外にはもたないわれわれは自らが偶然に帰属している文化集団を出発点とする以外に会話を開始することはできないという現実を確認したうえで、重要なのはそれぞれの人種が自らの文化を中心に生活しつつ強制的な合意を目指して会話をどこまでも継続することであると主張する<sup>28</sup>。「われわれはわれわれから始めなければならない」(Rorty 1989 b, p. 198) というスローガンから連想されるファシズムの再来への警戒に対してローティは、プラグマティズムの自文化中心主義がファシズムの自文化中心主義と異なり、われわれの集団は他の集団の根絶や追放ではなくますます大きくますます変化に富んだエスニックグループの創造へと向かうものであることを強調する (cf. Rorty 1989 b, p. 198; Reese-Schäfer S. 106)。さしあたって自らが偶然に身を置く文化から出発しながら、異質な他者との一致ではなく異質な他者との共生の可能性を措定した会話を続けることにより、強制によらない合意を通じて他の文化との連帯に到達するというこの構想については一多元化とグローバル化の浸透した現代社会における価値体系を再編するうえでの有効性を含めて一活発な議論が展開されている<sup>29</sup>。

#### 4. むすび —ネオプラグマティズムの先にあるもの—

真理獲得を重視し認識論を軸とする—それゆえに、普遍的共約化を前提とし永遠性を目指して構築される体系的哲学 (systematic philosophy)<sup>30</sup>に對置するかたちでローティによって唱えられた啓発的哲学 (edifying philosophy)<sup>31</sup>は、普遍的共約化への根源的な懐疑から出発し、「変則的 (abnormal) であり、未知の力によってわれわれの古い自我からわれわれを取り出し、われわれが新しい存在になることを助けてくれる」(Rorty 1979, p. 360) 哲学である。啓発的とは一建設的とは異なり—「より興味をかきたてる、実り豊かで、すぐれた、新しい語り方を見出そうとする試み」(ibid.) を表する術語であり、この術語のもと具体的には「他の文化や他の時代とわれわれ自身の文化とを関係づけようとする、あるいは共約不可能な語彙によって共約不可能な目的を追求する学問とわれわれ自身の学問とを関係づけようとする解釈学的活動」(ibid.)、「反転した解釈学がとる新たな目的、新たな言葉、新たな学問を生起

<sup>28</sup> ローティはガダマー (Hans-Georg Gadamar, 1900-2002) の解釈学の教養から発想を得て、会話による人間形成を構想する。

<sup>29</sup> ヌスバウム (Martha C. Nussbaum) は、ローティの唱える自文化中心主義が一好戦的愛国主義と同様に一危ういものであることを指摘し、警鐘を鳴らす (cf. Nussbaum 1996, p.14) が、レーゼ・シェーファー (Walter Reese-Schäfer) は、ローティの自文化中心主義が北米文化に執心したイデオロギーとは異なり、不利な立場におかれたり権利を奪われたり辱められている人々の集団への認知・感受の拡大に向かうものであるとしてこれを支持している。レーゼ・シェーファーによれば、ローティの自文化中心主義は、「意思疎通というプラグマティズムの命令法を考慮すると、カントの普遍主義の立場とそれほど隔たっていない」(Reese-Schäfer 1991, S.133) とさえ主張する。

<sup>30</sup> 体系的哲学は哲学の主流に位置づけられ、カント (Immanuel Kant, 1724-1804)、デカルト (René Descartes, 1596-1950)、フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938)、ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970) によって代表される (cf. Rorty 1979, p.367)。

<sup>31</sup> 啓発的哲学は哲学の傍流に位置づけられ、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)、キルケゴール (Søren Kierkegaard, 1813-55)、ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900)、サンタヤナ (George Santayana, 1863-1952)、ジェイムズ、デューイ、後期ウィットゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889-1951)、後期ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) などによって支えられてきた (cf. Rorty 1979, p.367)。伝統の形成には与しないことから相対主義やシニシズムといった非難にさらされることが多い。

させようとする《詩的》な活動」(ibid.)が期待されている。したがって啓発的哲学の立場からは一挑戦的意味を含めて一価値教育の分野にも多岐にわたる提言がなされることになる<sup>32</sup>。

ローティのネオプラグマティズムはドイツでは当初「(単なる)流行思想として、ヤッピー的退行として、またアメリカの芸人哲学として」(Reese-Schäfer 1991, S. 9)過小評価される傾向もみられたが、価値教育に関わる議論ではハーバマスを主要な論客とする交流が行われている。ローティの目に映るハーバマスは「アイロニストになることを忌避するリベラリスト」(Rorty 1989, p. 61)である。ハーバマスは「科学は合理的」で「宗教は非合理的」であるという図式を相対化したことによってポストモダンに与するものの、「コミュニケーションな理性」を「主観中心の理性」に優越させることによって間主観性の理性—人間個人に内在するものとしてではなく、人間社会に内面化された規範としての理性—の強調に傾き (cf. Rorty 2004, S. 34)、結果的に、この「コミュニケーションな理性」による合意形成を目指す公共性のプロジェクトというモダンの「大きな物語」を抜け出せていないという点をローティは批判する<sup>33</sup>。モダンにとらわれることのない発想から生じうるものは、ローティによれば、合意形成といった着地点をもたない開かれた会話を継続することによる「われわれ」意識を拡張するプロジェクト以上のもものではありえないからである。

ローティとハーバマスのあいだには、それぞれのプロジェクトを遂行するための方途についても相違がみられる。自らのプロジェクトを「リベラルな文化は詩化された文化 (a poeticized culture) になる」(Rorty 1989 b, p. 65)と表現するローティは、「想像力 (Imagination) が善にとっての最良の道具なのであり [...] 芸術は倫理学以上に道徳的である。[...] 人間性に関する道徳の預言は常に [...] 詩人によってなされてきた」(ibid., p. 69)というデューイの『経験としての芸術 (Art as Experience)』(1934)からの引用に依拠しながら、詩に代表される芸術が自らのプロジェクトの遂行に果たしうる役割を高く評価するが、一感性により高い比重をおくジェイムズ、デューイに依拠するローティとは対照的に一理性により高い比重をおくパース、ミードに依拠する (cf. Horster 1991, S. 16) ハーバマスはこれに強く反発する。さらにローティはデューイが『誰でも信仰 (A Common Faith)』(1934)において「より大きな全体の部分であるとわれわれが認めることを必要としているという依存感情の表れとしてロマン主義汎神論の類」を重視していることに注目する (Rorty / Vattimo 2006, S. 92)。「科学と情緒は深く交流し、実践と想像力は密に織りあわされる。そこでは、詩と宗教感情はおのずから咲き出した人生の花となる」(Dewey 1920, p. 164)として詩と同様に宗教が想像力の糧として機能しうることを主張するデューイの見解は、ローティの構想の後ろ盾としての役割を果たす一方で、ハーバマスの構想には疑義を投げかけるものとなる。

「コミュニケーションな理性」を重視したハーバマスがナショナルなものに対して抱いていた姿勢は、リベラルな愛国心として提唱された憲法愛国主義のなかに顕著である。憲法愛国主義はシュテルンベルガー (Dolf Sternberger, 1907-89)によって提唱され、ハーバマスの再解釈を通じて周知されるようになった、感性よりも理性に訴えるナショナルなものへのアイデンティティを推奨する考え方である。民主主義市民社会は、「ネーションに根をおろしたナショナル・アイデンティティ」(Habermas 1991, S. 16)すなわち共同体の有する伝統・歴史・慣習へのアイデンティティではなく、「すべての国民市民を共通の政治文化へと社会化すること」(ibid.)すなわち所属する国家のかかげる政治的体制 (= 憲法の基本的理念) へのアイデンティティを求めなければならない。アイデンティティの所在をこのように規

<sup>32</sup> ただし、ローティは哲学が過度に教育目的に影響を与えることには警戒を促している (cf. Rorty 1990, p.44)。

<sup>33</sup> ローティはさらに「哲学的実在論と実証主義的還元とを回避するために、カントの超越論的態度を要求する」(Rorty 1979, p.382)点にもハーバマスの限界を指摘している。

定することによって、ハーバマスは「多様性をもつ意義と多文化社会のさまざまな生活形式の完全な共存」(ebd.)を同時に認める態度が育成できると考えるのである。

「真理獲得の重要性を減じ、それを教育の一要素とみなそうとする解釈学的視点は、われわれがいったん別の観点に立ってみるののでなければ、可能とはならない。教育は、文化への同化から出発せざるをえない」(Rorty 1979, p. 365)というローティの主張は説得力をもつが、その一方で、文化の揺籃である—そして、価値教育の基点となるアイデンティティがしばしば収斂されていく—ナショナルなものの教育には、冒頭に引用したスミスの指摘にも見られるように、一宗教性を含む—感性のもつ陥穽への警戒が求められているという事実がナショナルなものへの関心が高まりをみせる今日改めて問われているといえるだろう。

## 文 献

- Baader, Meike Sophia (2005): Religionstheorie und plurale Welt bei William James. In: Daniel Tröhler / Jürgen Oelkers (Hrsg.): Pragmatismus und Pädagogik. Zürich: Pestalozzianum, S. 51–67.
- Behler, Gabriele (1999): Schule muß im Takt bleiben ... Der Bildungsauftrag der Schule und Chancen für eine Schulreform. In: Christoph T. Scheilke / Friedrich Schweitzer (Hrsg.): Religion, Ethik, Schule. Bildungspolitische Perspektiven in der pluralen Gesellschaft. Münster: Waxmann, S. 17–26.
- Bellmann, Johannes (2007 a): Der Pragmatismus als Philosophie von PISA? Anmerkungen zur Plausibilität eines Deutungsmusters. In: Zeitschrift für Erziehungswissenschaft 10 (3), S. 421–437.
- Bellmann, Johannes (2007 b): John Deweys naturalistische Pädagogik. Argumentationskontexte, Traditionslinien. Paderborn: Schöningh.
- Brumlik, Micha (2008): Besprechungen. Johannes Bellmanns “John Deweys naturalistische Pädagogik”, Fritz Bohnsacks “John Dewey”, Martin Hartmanns “Die Kreativität der Gewohnheit”, Klaus Pranges “Herbart und Dewey”, Douglas J. Simpsons “John Dewey” und Robert Wentz’ “Demokratie am Scheideweg”. In: Zeitschrift für Pädagogik 54 (3), S. 435–438.
- Dewey, John (1917 / 1980): Conscience and Compulsion. In: Jo Ann Boydston (Ed.): John Dewey. The Middle Works 1899–1924. Vol. 10. Carbondale: Southern Illinois University Press, p. 260–264.
- Dewey, John (1920 / 1950): Reconstruction in Philosophy. New York: New American Library [J. デューウィ著 清水幾太郎・清水禮子訳 哲学の改造. 岩波文庫 1968].
- Dewey, John (1934 / 1960): A Common Faith. New Haven: Yale University Press [デュウイー著 岸本英夫訳 誰でもの信仰. 春秋社 1951].
- Dewey, John (1934): Art as Experience. New York: Minton, Balch & Company [J. デューイ著 河村望訳 経験としての芸術. 人間の科学社 2003].
- Fetscher, Caroline (2007): Mitleid kann man lernen. In: Tagesspiegel. 11. Juni.
- Gonon, Philipp (2005): Dewey und James in Deutschland. Verpasste Rezeptionschancen des amerikanischen Pragmatismus in der deutschen Pädagogik. In: Daniel Tröhler / Jürgen Oelkers (Hrsg.): Pragmatismus und Pädagogik. Zürich: Pestalozzianum, S. 179–194.
- Habermas, Jürgen (1991): Staatsbürgerschaft und nationale Identität. Übersetzungen zur europäischen Zukunft. St. Gallen: Erker.
- Horster, Detlef (1991): Richard Rorty zur Einführung. Hamburg: Junius.
- Ito, Toshiko (2008): Förderung des Patriotismus als Ziel der Erziehung? Wandel und Kontinuität in Japan. In: Jahrbuch für historische Bildungsforschung 14.
- James, William (1906): The Moral Equivalent of War.
- James, William (1907 / 1975): Pragmatism. Cambridge: Harvard University Press [W. ジェイムズ著 梶田啓三郎訳 プラグマティズム. 岩波文庫 1957].

- 影山礼子 (1994) : 成瀬仁蔵の教育思想. 成瀬のプラグマティズムと日本女子大学校における教育. 風間書房.
- Kamphausen, Georg (2005): *Gemeinschaft und Kulturprotestantismus. Oder: warum der Pragmatismus in Deutschland nicht viele Freunde hat.* In: Daniel Tröhler / Jürgen Oelkers (Hrsg.): *Pragmatismus und Pädagogik.* Zürich: Pestalozzianum, S. 159–178.
- Mead, George Herbert (1929): *National-Mindedness and International-Mindedness.* In: *International Journal of Ethics* 39, S. 385–407.
- 文部省 (1946) : 国民学校公民教師用書. 東京書籍.
- 仲正昌樹 (2008) : 〈宗教化〉する現代思想. 光文社新書.
- 中村清 (2008) : 国家を超える公教育. 世界市民教育の可能性. 東洋館.
- 中嶋邦 (1986) : 婦一協会小考 (1). その成立を中心に. 日本女子大学紀要文学部 36 53-64 頁.
- 中嶋邦 (1987) : 婦一協会小考 (2). その初期の活動を中心に. 日本女子大学紀要文学部 37 47-76 頁.
- 中嶋邦 (2002) : 成瀬仁蔵. 吉川弘文館.
- 成瀬仁蔵 (1907 / 1976) : 主行主義に就いて. 成瀬仁蔵著作集 第2巻 日本女子大学 所収 820-847 頁.
- Nussbaum, Martha C. (1996): *For Love of Country? In a New Democracy Forum on the Limits of Patriotism.* Boston : Beacon press.
- Ohnezeit, Maik (2007): *Was ist des Deutschen Vaterland?* Braunschweig: Braunschweiges Landesmuseum.
- 岡田謙・真下信一・勝田守一 (1956) : 高等学校社会科 社会. 中教出版.
- Reese-Schäfer, Walter (1991): *Richard Rorty.* Frankfurt am Main / New York: Campus.
- Rorty, Richard (1979): *Philosophy and the Mirror of Nature.* Princeton: Princeton University Press [R. ローティ 著 野家啓一監訳 哲学と自然の鏡. 産業図書 1993].
- Rorty, Richard (1982): *Consequences of Pragmatism (Essays: 1972-1980).* Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Rorty, Richard (1988): *Solidarität oder Objektivität? Drei philosophische Essays.* Stuttgart: Philipp Reclam jun.
- Rorty, Richard (1989 a): *Education, Socialization, and Individuation.* In: *Liberal Education* 75 (4), p. 2–9.
- Rorty, Richard (1989 b): *Contingency, irony, and solidarity.* Cambridge: Cambridge University Press [R. ローティ 著 齋藤純一／山岡龍一／大川正彦訳 偶然性・アイロニー・連帯. リベラル・ユートピアの可能性. 岩波書店 2000].
- Rorty, Richard (1990): *The Dangers of Over-Philosophication.* In: *Educational Theory* 40(1), p. 41–44.
- Rorty, Richard (1997): *Laßt uns das Thema wechseln.* In: *Die Zeit.* 18. Juli.
- Rorty, Richard / Vattimo, Gianni (2006): *Die Zukunft der Religion.* Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Schavan, Annette (2002): *Die Notwendigkeit des christlichen Religionsunterrichts in der Schule.* In: Achim Battke / Thilo Fitzner / Rainer Isak / Ullrich Lochmann (Hrsg.): *Schulentwicklung – Religion – Religionsunterricht. Profil und Chance von Religion in der Schule der Zukunft.* Freiburg: Herder, S. 42–48.
- Smith, Anthony D. (1991): *National Identity.* London: Penguin Books [アントニー・D・スミス著 高柳先男訳 ナショナリズムの生命力. 晶文社 1998].
- Smith, Anthony D. (2003): *Chosen People.* Oxford: Oxford University Press [アントニー・D・スミス著 一條都子訳 選ばれた民. ナショナル・アイデンティティ、宗教、歴史. 青木書店 2006].
- Tröhler, Daniel / Oelkers, Jürgen (2005): *Pragmatismus und Pädagogik. Mehr als eine historische Alternative?* In: Daniel Tröhler / Jürgen Oelkers (Hrsg.): *Pragmatismus und Pädagogik.* Zürich: Pestalozzianum, S. 7–15.
- 鶴見俊輔 (1986) : アメリカ哲学. 講談社学術文庫.
- 魚津郁夫 (2006) : プラグマティズムの思想. ちくま学芸文庫.
- Wenzel, Uwe Justus (2007): *Mitfühlender Liberalismus.* In: *Neue Zürcher Zeitung.* 12. Juni.
- 山田英世 (1983) : 明治プラグマティズムとジョン＝デューイ. 教育出版センター.
- 柳沼良太 (2002) : プラグマティズムと教育. デューイからローティへ. 八千代出版.
- 柳沼良太 (2008) : ローティの教育論. ネオ・プラグマティズムからの提言. 八千代出版.